
自殺と自傷

精神分析的視点からの治療・予防・
ポストベンション

スティーブン・ブリッグズ,
アレッサンドラ・レマ,
ウィリアム・クラウチ編
高野 晶訳

岩崎学術出版社, A5判 320頁, 5,500円, 2025年2月刊

(東洞院心理療法オフィス／太子道診療所) 北村婦美

本書は、自殺や自傷といった自己破壊行為の裏側にある内的世界を、精神分析的背景をもつ多彩な地域の臨床家たちが描き出した共著である。彼らの現場も、分析オフィスから医療機関・大学・研究機関など多岐にわたっている。

訳者の高野氏は、精神分析の学会や協会において研鑽を積む一方、総合病院で約17年間にわたり救命救急センターのコンサルテーション・リエゾンを担当し、自殺企図患者のマネジメントを続けてきた。こうした経歴からも見て取れるように、氏は精神分析の本質を追究しながらも臨床現場に身を置き、そこで分析の知がどのように活用可能かを探究してきた人物であり、本書の訳者としてはまさに適任といえる。

さて訳者も述べているように、自殺対応の現場において精神分析は、とすると即戦力ではないと考えられてきた。確かに時間をかけ自己探究を目指す精神分析と、そもそも救命が問題になる自殺対応の現場とは、かけ離れたものにも思われる。明確な外的指標によって自殺リスクを評価し、希死念慮を呈しうる疾患の治療に力を注ぎ、必要なら閉鎖病棟への入院も含めた対応をとる方が有効だ、と。

けれども評者は自殺という現象に対して、それだけでは割り切れない疑問を抱いてきた。たとえば若者の唐突な自殺や、うつ病や統合失調症などの精神疾患をもたない人の自殺については、どう考えればいいのだろうか？ チェックリストには引っかけなかったのに、突然死を選んだかに見える人については？ また評価だけでなく、その後の関わりにおいても悩みはつきない。自殺予防のため入院とせざるを得ない局面でも、自由を厳しく制限することによって、本人をより深い孤独に追い込みはしないのか？ 要するに外的情報だけを基にマニュアル化するには、あまりに多様な様相をもっているのが、自殺という事象なのだ。

そういう切実な思いで本書を開くと、自殺に引き寄せられる人がその内界で何を守ろうとし、そのかわり何の息の根を止めようとし、何に復讐しようとして死を選ぶのかを、内側から理解しようとする発想にまず驚く。著者らは実際に自殺志向性を抱えた人との（多くは苦悩に満ちた）関わりを通して得た知見を、本書を通じて伝えている。まさに本書の原題（Relating to Self-Harm and Suicide）が示しているように、自殺に向かおうとする人との内的な関わりを通じて、自殺をめぐる事態をとらえているのだ。

当事者が（孤独を含め）関わりにおいて感じてきた苦しみの質を推し量れなければ、援助者がその人と、内側から繋がることはできない。また環境調整するにもどこから手を付ければ良いのか、その手がかりさえ得られない。訳者はあとがきで「理解の準拠棒を持つことは、対応の構え方の足場となり、さらに臨床場面での理解や具体的な対応や予測に繋がる」と述べているが、これは評者にとっても深く頷かされる言葉だった。ぜひ一読をお薦めしたい。

原書：Stephen Briggs, Alessandra Lemma, William Crouch (Eds) : Relating to Self-Harm and Suicide : Psychoanalytic perspectives on practice, theory and prevention